

訪日外国人旅行者の動き（前編）

— 中国・韓国・ロシアからの観光流動を中心に —

富山県貿易・投資アドバイザー 野村 允

はじめに

本年、国際観光振興会（JITO）は、例年通り、「訪日外国人旅行者調査（2001～2002年）」（平成15年1月発行）および「日本の国際観光統計（2002年）」（平成15年9月発行）を発刊し、また日本としてグローバル観光戦略をたてるための基礎的調査「訪日海外旅行市場調査（平成15年3月）等」を実施した。

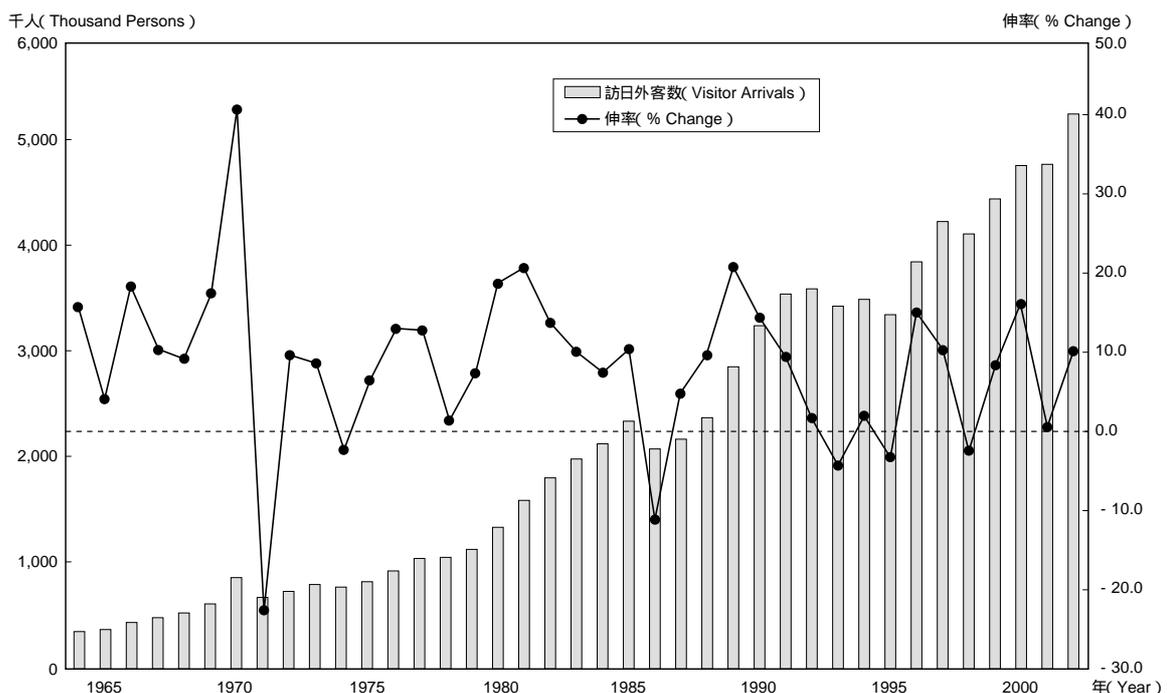
本稿は、これらの資料および大手旅行業者へのヒアリングを中心に、中国・韓国およびロシア（極東地域）からの訪日旅行者の動向を簡単にまとめたものである。

1 訪日旅行者（インバウンド）の概況

「日本の国際観光統計（2002年）」によると、逐年、訪日外客数は着実に伸びている（図1）。2002年の訪日外客数は542万人（対前年比9.8%増）となり、初めて500万人を超えた。ちなみに、観光客数は訪日外客数の6割強（約340万人）を占めているものと推測される。

訪日外客数が好調な伸びを示した背景として、2002年には①日中国交正常化30周年事業の実施、②FIFAワールドカップの日韓共催など最大の訪日旅行市場である韓国および訪日団体観光旅行が好調な中国からの訪日を後押しする大型イベント効果、③成田空港第2暫定滑走路の利用開始による

図1 年別 訪日外客数の推移（1964年～2002年）



資料：「日本の国際観光統計（平成14年）国際観光振興会

航空路線の拡大——などがあげられよう。特に、観光客数の増加が全体の訪日外客数の伸びを牽引したのと言えよう。

地域別では、いずれの地域も前年比プラスになったが、アジアからの訪日外客数は343万人(対前年比10.8%増)となり、訪日外客総数の63.2%を占めた。中でも、韓国からの訪日客数が127万人(対前年比12.4%増)に達し、4年連続トップの地位を確保した。中国からの訪日客数は、2000年9月、訪日団体観光旅行が解禁されたのを機に、観光客数が好調な伸びを持続し、45万人(対前年比15.4%増)となった。

ちなみに、2002年の出国日本人数(アウトバウンド)は1,652万人(対前年比1.9%増)となり、日本人の海外観光渡航が自由化された1964年以降、過去最大のマイナス成長を記録した前年に比し小幅ながらプラスに転じた(図2)。行先別にみると、第1位はアメリカ(363万人)、次いで中国(293万人)、韓国(232万人)、香港(139万人)、タイ(124万人)と続いている。特に、中国への訪問が着実に伸びているのが特徴的である。

2 中国からの訪日客の動向

今回実施された「訪日海外旅行市場調査(アン

ケート調査)の中国に関する概要は表1の通りである。

(1) 中国人の海外旅行事情

以下、「訪日海外旅行市場調査」の3編に共通する総論の部分を以下の通り集約した。

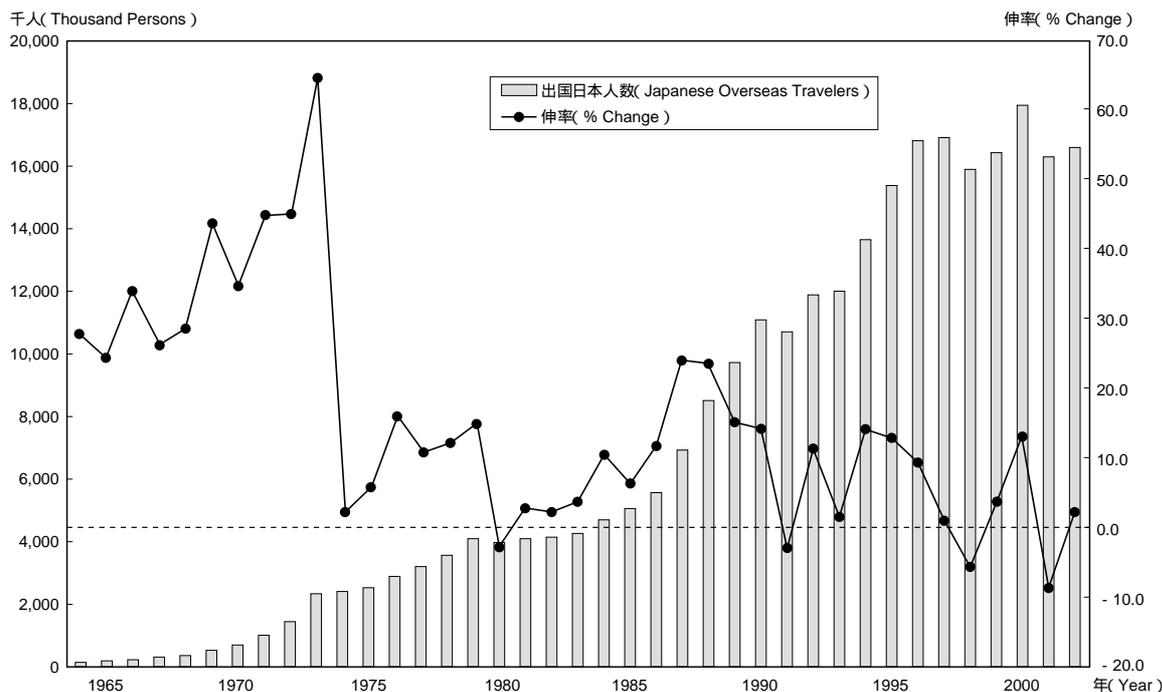
A 出入国状況

2002年における中国人の海外への出国人数は延1,660万人(対前年比36.8%増)に達した。このうち、因公旅券による出国人数は654万人(同26%増)、因私旅券による出国人数は延1,006万人(同44.8%)となった。注:因公旅券は、公務旅行者に対して外交部から発給され、因私旅券は、プライベート旅行者に対して公安部から発給される。

出国先別にみると、香港とマカオが最も多く、出入国総数の5割以上を占めている。第3位は日本であり、年々着実に増加している。なお、国務院が批准した中国人私費出国旅行の目的地は24カ国・地域となっており、日本への旅行はまだ北京、上海、広東省での試験的実施の段階にある。

中国公安部出入国管理局のデータによると、2001年中国から日本を訪問した人数は延61万人(中国人の出国総数の5%)である。

図2 年別 出国日本人数の推移(1964年~2002年)



資料:「日本の国際観光統計(平成14年)国際観光振興会

表1. 「訪日海外旅行市場調査」のアンケート調査概要

編別	項目	調査地点(対象人員)	調査期間	調査場所
中国編		北京 (1,204人)	2003 / 2 .3 ~ 3 .10	ホテル、レストラン、体育館など
		天津 (517人)	"	ホテル、マンション、レストランなど
		瀋陽 (808人)	"	ホテル、レストランなど
上海編		上海 (1,014人)	2003 / 1 .30 ~ 3 .10	レストラン、公園など
		南京 (520人)	"	レストラン、教育センターなど
		杭州 (506人)	"	学校、劇場など
広東編		広州 (1,006人)	2003 / 1 .30 ~ 3 .10	文化ホール、学校など
		深圳 (508人)	"	ホテル、教育センターなど

注：上記3編のほか、香港編あり（3編と形式を若干異なる）

B 海外旅行を促す要因

中国人の海外旅行を促す要因として、①着実な経済成長、②収入安定と上昇、③連休制度の導入、④旅行目的地の増加、⑤出国手続の簡素化、⑥旅行会社の開放——などがあげられている。特に、出国手続の簡素化について、2002年12月31日までに、24カ所の大・中規模都市でパスポート取得が簡素化されたが、2005年までには中国のすべての大・中規模都市で実施される予定である。ちなみに、現在のパスポート申請方法は、中国人が身分証明書と戸籍抄本を基に即パスポートを申請・受け取りすることが出来るようになった。申請から受け取りには14営業日を必要とするということである。

C 海外旅行情報の入手方法

海外旅行に際して、旅行情報を入手する方法は、大別すると、“友人からの口こみ”と“旅行会社”になり、両者合わせて全体の8割弱を占める。次いで、「旅行ガイドブック」である。そのほか、今回のいくつかの調査地点（北京、上海、深圳など）によって、若干の違いは見られるものの、「インターネット」、「新聞・雑誌」、「テレビ・ラジオ」などが多く利用されている点で共通性がある。

D 人気のある海外旅行コース

北京市の10大旅行会社に例をとると、目下売れ筋のコースとして、①シンガポール・マレーシア・タイ（8～11日）、②タイ（5～7日）、③香港・マカオ（5日）、④オーストラリア・ニュージーランド（7～12日）などがある。人気の高い東南アジア、香港・マカオのコースは価格が最も安いこと（7日で3,000元程度）が主因であるが、7日で1万円程度と高いオーストラリア・ニュージーランドコースに人気が集まるのは“国の情緒”を売りとして

しているためということである（訪日のコースについては後述）。

(2) 訪日客の動き

A 訪日客数の推移

「日本の国際観光統計」から見た訪日中国人の数は、1995年以降、堅調に推移してきたが、2002年の訪日客数は45万人（対前年比15.6%増）となった。2000年9月から一部解禁となった訪日団体観光客の好調により、観光客数は10万人（対前年比40.5%増）に達した（表2）。

訪問先別では、主に東京都、大阪を中心とした大都市に集中している（表3）。都道府県別訪問率の推移をみると、2000～2001年に比べて、①愛知県の伸びが高い（7位→3位）、②福岡県の後退（5位→7位）、③奈良県の急伸（21位→10位）が目立った。ちなみに、北陸地域の訪問率は、3.2%であるが、石川県が前回調査に比べてランクアップ（34位→28位）したことが特筆される。

B 訪日客の特徴的観光行動

本項は、「訪日海外旅行市場調査」を実施した中国各地の諸地点を通して見た訪日中国人旅行者の具体的、特徴的な行動等をまとめたものである。なお、各項目については、北京・天津・瀋陽の調査を主体にし、その他調査地点での特徴的なものを加味する形をとった。

a 訪日に対する需要

①北京・天津・瀋陽の調査では、過去3年間に海外旅行した人は全体の13.4%（北京9.4%、天津35.2%、瀋陽5.7%）であったが、最も多く訪問した地域は香港、シンガポール、アメリカ、タイで、日本は第11位であった。訪問目的は、観光が主であるが（全体の65.2%）、訪日客の場合にはビジネ

表2. 目的別訪日中国人数の推移

年	項目	総計	観光客	商用客	その他客	一時上陸客
1998	人数(人)	267,180	35,616	66,417	134,425	30,722
	構成比(%)	100.0	13.3	24.9	50.3	11.5
	伸率(%)	2.5	6.5	3.5	9.4	13.4
1999	人数(人)	294,937	37,153	67,204	149,681	40,899
	構成比(%)	100.0	12.6	22.8	50.8	13.9
	伸率(%)	10.4	4.3	1.2	11.3	33.1
2000	人数(人)	351,788	45,270	77,429	173,303	55,786
	構成比(%)	100.0	12.9	22.0	49.3	15.9
	伸率(%)	19.3	21.8	15.2	15.8	36.4
2001	人数(人)	391,384	72,118	74,309	194,174	50,783
	構成比(%)	100.0	18.4	19.0	49.6	13.0
	伸率(%)	11.3	59.3	4.0	12.0	9.0
2002	人数(人)	452,420	101,299	91,189	220,573	39,359
	構成比(%)	100.0	22.4	20.1	48.8	8.7
	伸率(%)	15.6	40.5	22.7	13.6	22.5

資料:「日本の国際観光統計 - 平成14年 - 」国際観光振興会

表3. 訪日中国人の訪問都道府県(2001~2002)

順位	都道府県	訪問率(%)	順位	都道府県	訪問率(%)
1	東京	64.1	15	鹿児島	2.3
2	大阪	28.4		沖縄	2.3
3	愛知	20.6	18	北海道	2.0
4	千葉	18.6		宮崎	2.0
	神奈川	18.6		岐阜	2.0
6	京都	16.0		茨城	2.0
7	福岡	6.9		山口	2.0
8	山梨	5.2		秋田	2.0
9	兵庫	4.2		岩手	2.0
10	静岡	3.3	25	熊本	1.6
	奈良	3.3		広島	1.6
	長野	3.3		佐賀	1.6
	埼玉	3.3		石川	1.6
14	栃木	2.9		富山	1.6
15	大分	2.3	30	福島	1.3

資料:「訪日外国人旅行者調査」(2001~2002)国際観光振興会
 スが圧倒的に多いのが特徴である。

②現在、訪日を希望している人や具体的計画を立てている人は全体の81.3%を占めたが、特に40~49歳に集中、既婚者が多かった。

③日本のイメージについては、プラスのイメージを持つ人が多かった。例えば、日本は産業が発達している国だと思っている人が全体の74.6%を占め、次いで日本を生活、教育水準の高い国とイメージしている人が全体の52.0%を占めた。

④日本で行きたい地域は、東京(全体の75.1%)、北海道(62.8%)、大阪(54.3%)となっている。

⑤日本訪問の目的は、文化、歴史的建造物の見学(城、寺院、仏閣、街並みなど)が全体の75.5%を占め、自然(山、海、火山など)を楽しむ人が51.3%を占めた。

⑥訪日する時期については、5月が最も多く、次いで4月であった。なお、訪日計画は1カ月~2カ月前に、検討・策定するケースが最も多かった。

⑦旅行費用については、5,000~7,000元が適当であると回答した人が最も多く、次いで、9,000~1万1,000元であった。

⑧滞在日数は、7~10日が最も多かった。なお、家族、親戚と出掛けたいとする人が最も多く、次いで友人との訪日であった。

⑨これまで訪日したことのある人について、「再度訪日する可能性がある」と回答した人が全体の71.4%を占め、そのうち、19%の人は、1年以内に訪日する予定であると回答した。

b 訪日旅行を阻害する要因

同調査では、訪日に際し、いくつかの懸念を抱いている中国人が多い点を指摘している。具体的には、①言葉が通じないこと(全体の8割弱)、②日本の物価が高いこと(同4割)、③ホテル・交通手段の予約・手配が難しいこと、④治安問題、⑤食事、⑥時間不足——などがあげられた。

なお、これらの懸念は、年代、職業、収入、学

歴などの違いから強弱の差を窺うことが出来る。

c 旅行情報の入手方法

前述した通りである。

C 中国旅行者からみた訪日旅行

「訪日海外旅行市場調査」では、北京・上海・広州にある旅行会社へ直接インタビューを実施している。以下、訪日ツアーを組む場合における問題点などをまとめた。

a 北京の10大旅行会社の感想

①北京の旅行会社が提供している主なコースは、4日コース(6,000元程度)、6日コース(8,000元程度)、7日コース(1万1,000元程度)である。訪問する都市および旅行コースはほぼ同じである。旅行会社は、中国人が訪日するのは殆ど初めてということもあり、首都や他の大都市を見たいという希望が多く、東京を含め大都市が中心となっている。各社の毎年の訪日人数は延1,000~2,000人、3つの連休と夏休みがピークである。

②日本を選定した理由として、国务院の批准した旅行目的国である、日中文化交流は長く両国の文化には一定の共通性がある、距離が近い、経済発展のレベルが中国と異なり新鮮味がある、消費者の需要が高い——などをあげている。

③訪日ツアーを組む上での日本側の問題点として、値段が高すぎる、航空便が少ない、ガイド不足と中国語のレベルが低い、ビザの取得に時間を要する、コースが単調、外国人に対するホスピタリティが欠けている——などを指摘している。

b 上海の5大旅行会社の感想

①訪日コースとして、沖縄コース(4日・5,800元程度)、本州コース(7日・1万2,000~1万4,000元程度)、九州コース(5~7日・8,000~9,000元程度)がある。最近、スキー、海浜リゾート・ショッピングなど特色あるツアーコースを開発し、北京に比べると旅行コースは多彩と言える。

②日本を選定した理由は、北京の場合とほぼ同じである。

③訪日ツアーを組む上での日本側の問題点として、北京が指摘した以外、日本国内の物価高、旅行情報とサービス面での不徹底などが指摘されている。

c 広東の6大旅行会社の感想

①東京および大都市訪問を中心としたスタンダードコース以外に、広州と深圳の旅行会社では、北海道コースとして“雪景色”、“スキー”を加えるなどコースの特色を強く打出している。

②日本を選定した理由は、特に、日本は伝統文化と現代文化が巧く融合した国であり、この2種類の文化が日本で見られる魅力を強調している。

③訪日ツアーを組む上での日本側の問題点として、北京、上海の旅行会社が指摘した点以外、言葉の障害(多くの施設には英語の表示がない)、食事に慣れない(冷たいもの、生ものへの抵抗、量が少ないなど)——などが指摘されている。

(3) 中国観光市場の将来

世界観光機関の調べによると、2020年までに中国は世界トップの旅行目的地となり、入国外国人旅行者数は延1億3,700万人(世界観光市場のシェア8.6%)になるものと予測している。

他方、中国は、世界第4位の大型観光客の供出国となり、出国海外旅行へ出かける人は延1億人(同6.2%)に達すると見られている。もっと卑近な例をあげれば、中国における過去5年間の出国者数は年率15%程度で好伸しているが、今後このスピードを続けるとすれば、2007年には3,300万人に達すると見られる。さらに、2007年以後もオリンピック(2008年)、上海万博(2010年)の開催を想定すると中国への観光流動はもっと活発化しよう。また、中国から日本への旅行者数は、2001年が出国総数の5%を占めたが、このシェアが今後とも維持されるとすれば2007年には延150万人になるものと推測される。

日中間の主要な交通手段である日中間の航空便は、現在、週327便、座席数8万3,218席、年間では1万7,004便、430万席となる。したがって、2007年には、訪日中国人数が150万人に達し、訪中日本人数が420万人(年率8%増)となり、合計570万人となることが予想される中で、必要となる航空機の座席数は660万席(現在の370万人に対する座席数430万席の比率を当てはめる)になるものと推測される。(今後の日中間の観光流動に対する課題、対応については、後編のまとめの項で記述する。)

(次号続く)